

「統合医療に、固有の評価基準が必要」

東京女子医科大学名誉教授

阿岸鉄三

統合医療 (integrative medicine) の統合 integration は、辞書的には、“部分・要素をまとめる”、“積分する”である。統合医療に含み込まれる補完・代替・伝統医療のあるものには、現代科学ではいまだ理解されない、すなわち、非科学的要素がある。現代科学に依拠する“科学的医療”と“非科学的医療”を統合することが、統合医療の本質であろう。科学は、分化・分析的であるが、分化と統合によって進化が起こる。積分によって、新しい次元の医療が生まれると理解される。科学的エビデンスを重視する医療、すなわち、EBM

(evidence-based medicine) の基本的理念には自己撞着がある。経験主義を排してとするが、経験の集積から帰納して理論を構築する科学は、経験を無視しては成立しない。また、患者の好み (patient preference) を尊重とするが、好みは主観的・質的であり、科学的思考と整合しない。伝統医療などを、現代科学的医療の立場から評価する場合、ダブルスタンダードを用いて、厳しく評価する傾向のあることが指摘されているなかで、補完・代替・伝統医療を科学的に評価する試みが行われてきた。それは、既成の科学的医療の枠組みの中で、一定の地位を獲得するための戦略としてだけで認められると考える。宗教・スピリチュアリティなども視野に入れる統合医療においては、脳生理学・認知行動科学などの新しい知見を無差別積極的に活用することは、心身全体を機械的に捉えようとする還元主義に陥る可能性がある。統合医療を科学的エビデンスからだけ評価することは、片手落ちである。

統合医療を確立させることは、パラダイムをシフトさせることではなく、科学的から非科学的までを透見する洞察力を持ってパラダイムを拡大させることである。統合医療を評価するには、量的評価から質的評価までを含む統合評価基準の構築が必要である。